

概 要 報 告

実施期日	令和7年8月5日(火)
部 会 名	中学校 技術・家庭（家庭分野）部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『体験と気づきを大切にした家族・家庭生活の学習』

提案概要

1. 育成したい資質能力

少子高齢化社会でありながらも核家族世帯が増えおり、子どもが高齢者と関わる体験が少なくなっている。異年齢の抱える困難さを知ることや体験を通して、高齢者との関わりについての基礎的な理解と技能を習得し、地域の人々と関わり、協働しようとする態度を育てる。

2. 研究の進め方

「体験的な学びに焦点を当てた授業づくり」を目指し、提案者の勤務校と近隣校とで協力し、授業実践を行った。

3. 実践の内容

実践授業①【高齢者体験を通した他者理解】

高齢者体験として、軍手をはめた状態ではさみを用いて紙を切る体験と、代表者が白内障や視野狭窄症の状態を知るためにゴーグルを装着する体験を行った。体験によって生徒から「こんな見えにくくなるとは思わなかった」「歩くのが怖い」という感想があり、異年齢とのふれあいが少ない子どもたちにとって、「体験する」ということがいかに大切かを感じられるものとなった。一方、体験できる生徒に限られたため、体験を行っていない生徒は自分事として捉えられていない様子が見られた。

実践授業②【学びを深める体験学習】

住まいの題材において、高齢者の身体の特徴を知るために疑似体験セットを装着する活動を取り入れた。授業の展開を工夫し、高齢者の体の特徴を知り、町の中で困難を感じる道や段差などを写真に収め、普段の生活でどのような大変さがあるか、グループで話し合うという内容であった。普段は意識していなかった道にも、高齢者の視点に立った気づきを得ることができた。また、グループによる「対話」によって、新たな視点に気付くことができ、考えが広がることの良さを再認識することができた。

実践授業③【深い学びにつなげる様々な立場を想定した体験】

実践授業①②を生かし、より自分事として捉えられるように、高齢者疑似体験においてコンビニエンスストアの場面を設定し、グループごとにロールプレイングを行った。店員、高齢者、他の客役と、3役を体験することでそれぞれの立場になって考えることができた。高齢者に対して思いやる気持ち大切だと感じている生徒がいる反面、高齢者の行動の衰えに否定的な意見も出た。グループ内で、「高齢者にどのような声かけや対応をしたら良いか」を話し合う中で、様々な意見が飛び交い、「体験」と「対話」から思考が深まることの良さをを感じることもできた。

4. 成果と課題

○成果1：体験的な学びの効果

ロールプレイングなど身近な場面を設定することで、生徒が他者の立場に立って考える力が育まれた。対話を通じて共感や気づきが深まり、心の動きが見られた。

○成果2：生きて働く知識の習得

地域の実情や高齢者の心身の変化を知ること、社会の課題に関心を持ち、自ら「問い」を生み出す姿勢が育った。

○成果３：「問い」づくりの促進

家族・地域・社会に関する課題を見つけ、自分の興味に基づいた問いを立てる活動が、思考の深化につながった。

○成果４：対話による考えの共有

個人の調べ学習とグループでの対話を組み合わせることで、学びが広がり、ワールドカフェ形式の発表で新たな発見が生まれた。

○成果５：思考の変容の可視化

授業前後で高齢者へのイメージをまとめることで、生徒自身が自分の考えの変化に気づくことができた。

○成果６：題材の組み合わせによる多面的な学び

「住まい」と「高齢者理解」の題材を組み合わせることで、異なる視点からの学びが可能になった。

●課題１：「問い」づくりの難しさ

実生活と結びついた体験がないと、形式的な問いに留まることが多い。テーマが広すぎると問いが散漫になるため、ある程度の絞り込みが必要である。

●課題２：多面的な見方の不足

生徒は、高齢者を「大変な存在」として捉えてしまうことがある。関わりの多様性を授業に反映する工夫が求められる。

●課題３：教材準備の困難さ

体験授業には綿密な準備が必要となる。道具の確保や他校との連携、授業進度の調整などが課題となった。

質疑応答

発表後の質疑応答の時間は取らず、ワールドカフェ形式の協議を実施し、グループの中で様々な意見交換を実施した。

協議の柱及び協議概要

協議の柱とキーワード

心を動かす授業 ～深い学びにつながる体験・対話～

- 1 教材・教具の工夫
- 2 地域とのつながり
- 3 カリキュラム・マネジメントの工夫

協議はワールドカフェ形式で実施した。小中校種を混ぜるように４人程度のグループを作り、意見交換を行ったのち、メンバーを変えて同一の協議を実施した。２回グループを変えた後、元のグループに戻り、まとめを行った。回を重ねるごとに活発な意見交換が行われた。

「心を動かす授業」の有効な手段として、“地域とのつながりや社会体験を通じた体験的な学び”や、“ＩＣＴの活用”、“グループワークの工夫による協動的な学び”、“コーディネーター・ゲストティーチャーの活用”などの意見が多く挙がった。一方で、“限られた授業時数”や“授業準備の負担”、“地域人材との継続的な連携”などの課題が、どのグループからも共通して挙がった。

まとめ概要

本実践は、これから大人へと巣立っていく中学生が、他者理解や共生についての考え方を広げることを目的として行った。限られた時間の中で学び、体験、発表と実践したが、最後の「問い」づくりにとっても難しさを感じる結果となった。この課題を解決させるために三つの解決策を考えた。一つ目は、「問い」づくりの基準を明確にさせること。二つ目は、３年間の学びのつながりを意識した授業計画をすること。三つ目は、コミュニティ・スクール（ＣＳ）との連携を充実させること。これらの課題や解決策を意識してよりよい授業実践を行い、高齢者や異世代に関する問いが生まれるよう努めていきたい。